

旭の里山・生きもの写真集

(岡山県美咲町旭地域)

その6 身近な野鳥たち

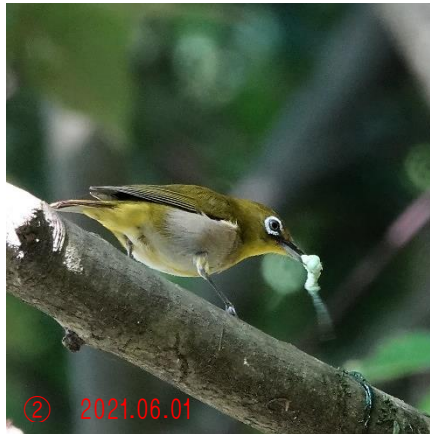


1. 一年中見られる鳥 (1)～(23)

(1)メジロ(メジロ科) 表紙、写真①～④



① 2023.05.25



② 2021.06.01



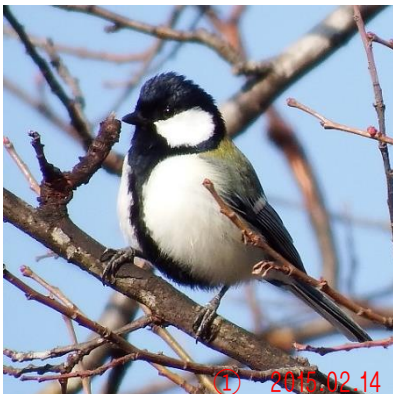
③ 2017.06.15



④ 2019.08.03

- ①ヤブツバキやウメ、サクラなどの蜜が好物。虫が少ない時期の花粉媒介に役立っている。
- ②虫や小さな木の実も食べる
- ③初夏のさえずりは複雑でよく響く。聞きなしは「長兵衛忠兵衛長忠兵衛」
- ④ほとんど群れで過ごし、カラ類とも混群を作る。バードバスで水浴び中。仲良しで文字通り目白押し

(2)シジュウカラ(シジュウカラ科) 写真①～③



① 2015.02.14



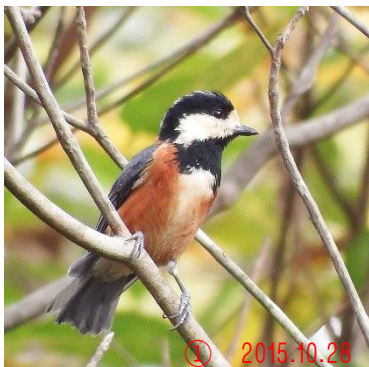
② 2014.05.18



③ 2014.05.18

- ①胸から腹に続くネクタイのような黒いラインが特徴。太いのがオス。細いのがメス。写真①はメス。
- ②巣箱もよく利用する。ヒナに巣立ちを促す親鳥
- ③巣立ち直前のヒナ

(3)ヤマガラ(シジュウカラ科) 写真①、②



① 2015.10.28



② 2019.09.01

- ①「ニー、ニー」というような独特の鳴き声で気づくことがある。冬には他のカラ類などと一緒に行動することも多い。
- ②エゴノキの種子が好物で、果実を嘴で上手に割って取り出す。木の隙間や地面に冬の食料として蓄える習性がある。

(4)エナガ(エナガ科) 写真①～⑤



- ①尾羽が長いので「柄長」
- ②愛らしさではトップクラス。
- ③樹皮に付いたカイガラムシなどを小さな嘴で器用に捕る。
- ④さくらの木の股で巣作り。見事なカモフラージュ。
- ⑤若鳥に水浴びを教える(左端が親鳥)。

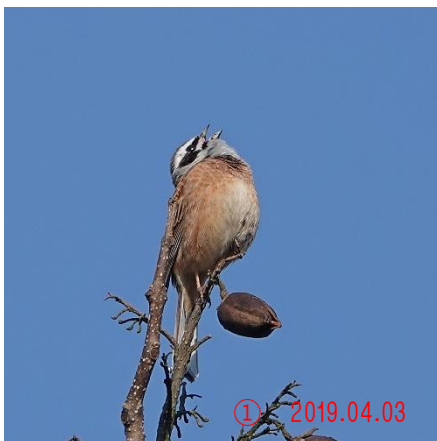


(5)イカル(アトリ科) 写真①、②



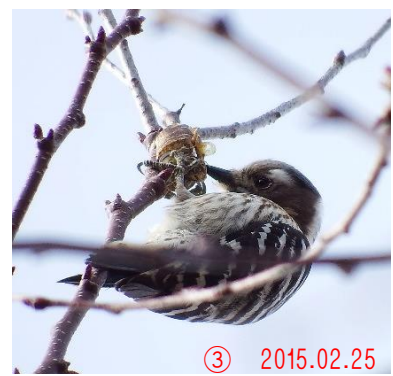
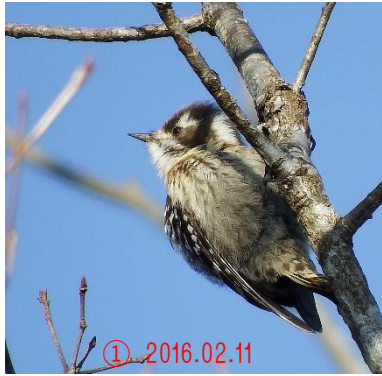
- ①ムグドリ大で、太く黄色いくちばしが目立つ。群れで行動し、「キーコーキー」のような美声でさえずる。「月・日・星」と聞きなすことも。昆虫や木の実を食べ、硬い実でも殻を頑丈なくちばしで割って中の核を食べる。
- ②地上で若鳥に餌を与える親鳥。

(6)ホオジロ(ホオジロ科) 写真①、②



- ①こずえで高らかにさえずるオス。「一筆啓上仕り候(いっぴつけいしょうつかまつりそうろう)」や「源平つつじ白つつじ」の聞きなしがよく知られている。
- ②普段は草の種子などを食べるが、繁殖期には昆虫を捕える。オスが捕えた虫を巣に運ぶ途中で一休み。頬(ほお)の部分が白いのでホオジロ。

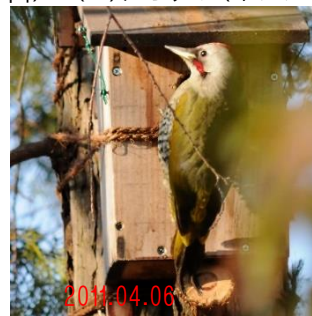
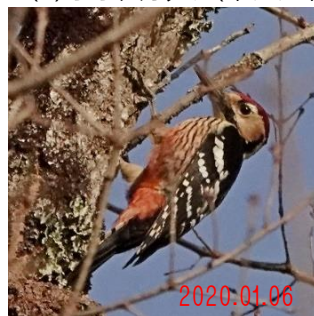
(7)コゲラ(キツツキ科) 写真①～③



- ①スズメ大のかわいいキツツキ。「ギー」という鳴き声や、コツコツと木をたたく音で気づくことが多い。冬はカラ類の群れと一緒に行動する姿がよく見られる。
- ②鋭くとがったくちばしを使って樹皮のすきまにいる虫を探す。
- ③木の枝のハラヒロカマキリの卵鞘(らんしょう・卵の入ったかたまり)をつついていた。

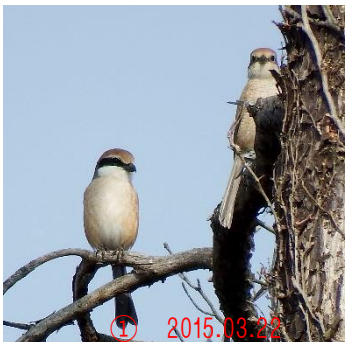
＜その他のキツツキ類＞

(8)アカゲラ(キツツキ科) (9)オオアカゲラ(キツツキ科) (10)アオゲラ(キツツキ科)



- (8)アカゲラ:ムドリ大。背中白い模様がよく目立つ。オスは後頭部に赤い部分がある(写真はオス)
- (9)オオアカゲラ:アカゲラより少し大きく、胸から腹にかけてまだらもようがある。準絶滅危惧(岡山県)
- (10)アオゲラ:アカゲラより少し大きい。この写真は、小鳥用の巣箱をくちばしで激しくたたいて大きな音をたてていた時。ドラミングといって、なわばりの主張やメスへのアピールのための行動。

(11)モズ(モズ科) 写真①、②



- ①左オス、右メス。オスの背は黒っぽく、翼に白斑がある。メスは褐色で腹部は淡褐色の波模様。秋から早春に見ることが多い。電線などに止まって、尾を回すように振る。秋には甲高い声で「キーキー」と鳴く(なわばり宣言で「モズの高鳴き」という)。
- ②オスが地上でバッタを捕えた。主に昆虫類、カエル、ミズなどを食べる。冬には、獲物の一部を枝などに刺しておく習性があり「モズのはやにえ」としてよく知られている。これについては諸説あるが、最近「はやにえはオスが配偶者獲得に必要な歌の質を高める栄養食としての効能をもつ」という論文が発表され注目されている。

(12)セグロセキレイ(セキレイ科)



(13)キセキレイ(セキレイ科)



(14)カワセミ(カワセミ科)



- (12)セグロセキレイ:石の河原を好むが、開けた場所にも来る。頭部から背中黒く、目の上の部分と腹は白い。
- (13)キセキレイ:セグロセキレイよりやや山地寄りで見ることが多い。オスはもっと黄色がはっきりしているのでこれはメス?
※セキレイ類はどれも長めの尾を上下に振る。また波状に上下しながら飛ぶという特徴がある。
- (14)カワセミ(カワセミ科):スズメ大。青い背とオレンジの腹が美しい。川や池の上の枝などからダイブして魚を捕る。崖の斜面に穴を掘って繁殖する。

(15)スズメ(スズメ科)



(16)ヒヨドリ(ヒヨドリ科)



(17)ウグイス(ウグイス科)



(18)カワラヒワ(アトリ科)



(19)キジ(キジ科)



(20)コジュケイ(キジ科)



(21)ダイサギ(サギ科)



(22)コサギ(サギ科)



(23)アオサギ(サギ科)



(15)スズメ:全国的に数が減っているという。巣が作れるような構造の家屋が減ってきていることが一つの原因のよう。コシアカツバメの巣を奪って利用しているのもよく見かける。

(16)ヒヨドリ:木の実を好んで食べ、冬には葉物野菜を食べることもあるので害鳥とみなされることもある。

(17)ウグイス:「ホーホケキョ」でおなじみだが藪を好むので姿を見ることは少ない。冬は「ジャッ、ジャッ」と鳴く(地鳴き。一般的には「笹鳴き」と呼ばれる)。

(18)カワラヒワ:翼と尾の一部が黄色く、飛ぶと目立つ。タンポポ、ハコベなどの種子を食べる。

(19)キジ:これはオスでメスは目立たない色。オスは春の繁殖時期には地上で「ケツ、ケーン」と大声で鳴いて羽ばたく。(裏表紙もキジ)

(20)コジュケイ:ハトよりひと回り小さい。春に藪の中から「チョットコイ・チョットコイ」と大声が響くのはこの鳥。警戒心が強くめったに姿を見せない。この写真は森の中で哺乳類調査用の自動カメラに写ったもので、残念ながら後ろ向き。中国から移入された外来種。

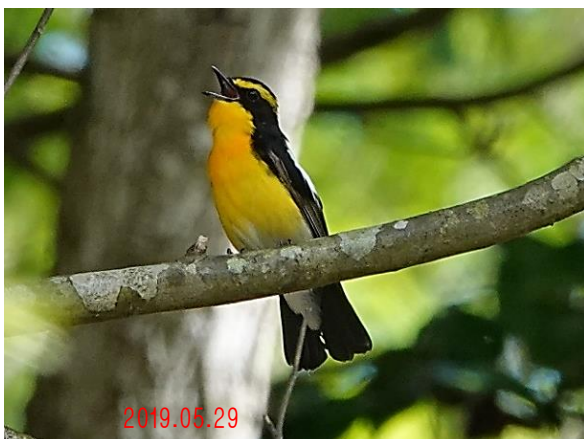
(21)ダイサギ:大型のシラサギ。首とくちばしが長い。夏羽の時期は目のあたりが青緑色で飾り羽も美しい

(22)コサギ:小型のシラサギ。くちばしと脚は黒く、足の指は黄色。夏羽では頭に2本の飾り羽がある。

(23)アオサギ:大型。背は灰色でくちばしと脚はくすんだ黄色、頭には黒い冠毛。水辺でじっと動かず獲物をねらうが、時にはこのように高い木の梢に止まることも。

2. 春から夏に見られる鳥 (1)~(6)

(1)キビタキ(ヒタキ科)



左 キビタキ

フィリピンやボルネオ島などで越冬し、繁殖のために渡ってくる夏鳥。オスはお覧のような美しさ。メスは地味。オスは高い木がある森で美しい声でさえずる。樹冠下の空間にすることが多いので、声を頼りに探しても見つけれないことが多い。

(2)コサメビタキ(ヒタキ科)



右 コサメビタキ

ユーラシア大陸南部やインドネシアなどで越冬し、夏に繁殖のために渡ってくるが、当地で見るとは少ない。秋の移動の時にも短期間見られることがある。

(3)ツバメ(ツバメ科) 写真①～③



① 2016.04.20



② 2018.07.20



③ 2019.06.28

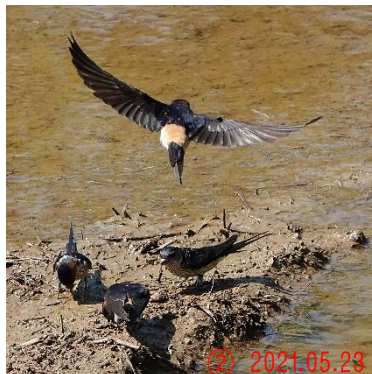
台湾、フィリピン、ボルネオ島北部などで越冬し、当地には3月頃にやってきて繁殖する。

- ①喉と額が赤く、腹は白い。
- ②建物に泥や枯草を材料にして、おわん型の巣をつくる。巣で親の帰りを待つヒナたち。(この巣がある家の1さんがスマホで撮影)
- ③巣立ち直後のヒナに電線で餌を与える。

(4)コシアカツバメ(ツバメ科) 写真①～③



① 2020.08.19



② 2021.05.23



③ 2020.06.17

東南アジアやインドなどで越冬し、当地にはツバメより1か月ほど遅く4～5月にやってくる。

- ①ツバメより尾が長く、やや大きく見える。胸から腹に筋状の紋がある。腰が赤褐色だが、下から見てもわかりにくい。
- ②ツバメより1か月ほど遅れて渡ってくる。写真は水が入った田で巣材の泥を集めているところ。
- ③大きな建物に巣を作ることが多い。巣はとっくり型。

(5)コチドリ(チドリ科) 写真①、②



① 2014.05.01



② 2013.05.13

よく似た鳥で冬にも見られるものもいるが、本種は夏鳥で5月頃から姿を見せる。本来は河原の小石や砂の地上で繁殖するが、ほぼ毎年、旭地域のこのグラウンドで産卵する。

- ①高速で飛行もするが、餌は地上を歩いて地中の昆虫やミズなどを探す。
- ②卵:巣らしいものは作らず地上に3、4個を産卵。砂や小石と紛らわしくまず気づかない。グラウンド整備やカラス被害で残念ながらヒナの孵化までいくことは少ない。ヒナは孵化後半日ほどで歩けるようになり、親鳥について歩いて餌を探す。親鳥が餌を運んでくることはしない。

(6) ブッポウソウ(ブッポウソウ科) 写真①～③



① 2015.06.23



② 2020.07.15

① 東南アジアで越冬し、5月の初めごろにやってくる。ヒヨドリより大きく、ハトより小さい。光沢のある青緑色でくちばしと脚が赤褐色。飛ぶと翼の白い斑が目立つ。飛行も華麗で「森の宝石」と呼ばれる美しい鳥。鳴き声は「ゲッ、ゲッ、ゲゲゲ…」というようなもので、美しくはないが一度聞くと忘れられない。枯れた高木や木製電柱にキツキ類が開けた穴を利用してはいたようだが、今はもっぱら巣箱を利用して繁殖。絶滅危惧Ⅰ類(岡山県)、絶滅危惧ⅠB類(環境省)。
 ② 大型昆虫を空中で捕える。巣箱にセミを運んできた。

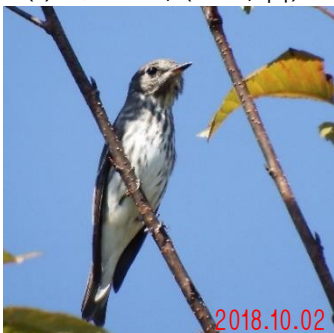
< 巣立ち直前の親子 >



巣立ち間際のヒナが大きく口を開けて待っている。親鳥は餌を間近で見せるが与えず、ヒナに巣立ちを促す。(2019.07.07)

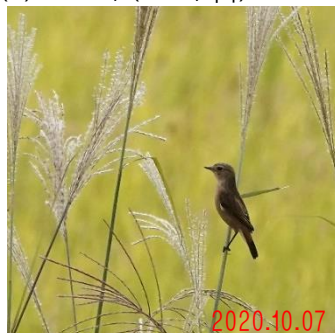
3. 秋～冬に見られる鳥 (1)～(15)

(1) エゾビタキ(ヒタキ科)



2018.10.02

(2) ノビタキ(ヒタキ科)



2020.10.07

(1) エゾビタキ

北海道以北で繁殖し、冬は東南アジアなどで越冬する。岡山県では春秋の移動中に見られるが、当地では春にはまだ見たことがない。

(2) ノビタキ

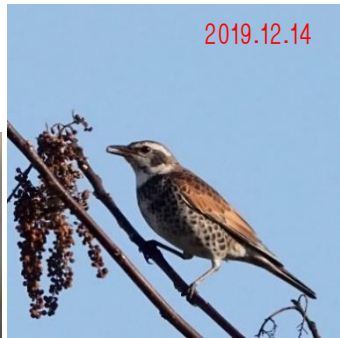
中部地方以北で繁殖し、東南アジアなどで越冬する。前種同様春秋の移動中に岡山県でも目撃情報が多く、当地でも春と秋に確認している。秋には小さな群れでスキの穂などに止まる様子が印象的。

(3)ジョウビタキ(ヒタキ科)



上:オス
右:メス

(4)ツグミ(ヒタキ科)



(5)シロハラ(ヒタキ科)



(6)トラツグミ(ヒタキ科)



(7)ミヤマホオジロ(ホオジロ科)



(8)カシラダカ(ホオジロ科)



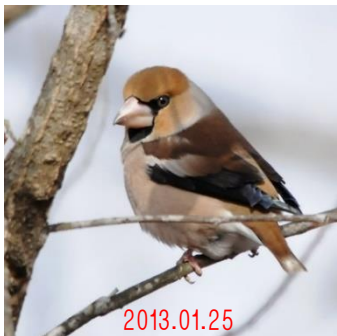
(9)アオジ(ホオジロ科)



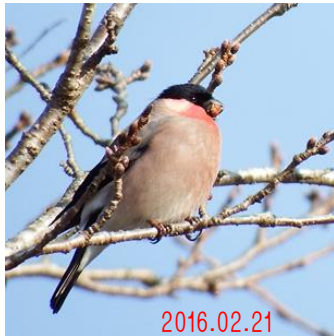
(10)アトリ(アトリ科)



(11)シメ(アトリ科)



(12)ウソ(アトリ科)



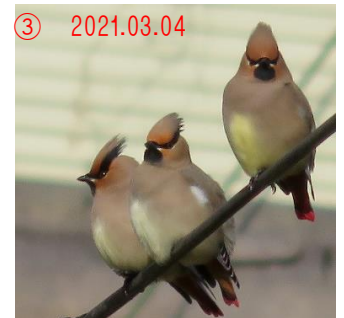
(13)ビンズイ(セキレイ科)



(14)ノスリ(タカ科)



(15)ヒレンジャク(レンジャク科) ①~③



(3)~(15)は冬から早春にだけ姿を見せる鳥で、「冬鳥(ふゆどり)」・「漂鳥(ひょうちょう)」に区分できる。冬鳥(A)は日本より北方で繁殖(子育て)し、越冬のために日本に渡ってくる鳥。漂鳥(B)は日本の中での季節移動。山や北方で繁殖し、より暖かい地域に移動して越冬する鳥。以下の解説では A,B で示す。

(3)ジョウビタキ(A)オスとメスで色がまったく違うがともに翼に白い紋がある。ヒッヒッという声を出す (4)ツグミ(A)やや大型で茶色っぽい翼とまだら模様の胸。土中の虫や木の実を食べる (5)シロハラ(A)ツグミ大で白っぽい腹。地上で虫を探すがカキの実も好物 (6)トラツグミ(B)ツグミより大きい。全身まだら模様。地上にいることが多い (7)ミヤマホオジロ(A)群れで林にいる。小さな声でチッチッと鳴く。時々頭部の羽毛を立てる。オス(写真)は目の付近の黒と黄が目立つ (8)カシラダカ(A)時々頭部の羽毛を立てる(名の由来)。開けた環境を好み、危険を感じると身を低くして周囲に紛れる (9)アオジ(B)胸から腹は黄色でまだら模様。オス(写真)は目の周囲が黒い (10)アトリ(A)写真はオスでメスはより淡色。ともに腹部は白。草木の実を食べる。山や水田などで大群が見られることも (11)シメ(B)太いくちばし、茶色のベレー帽、ずんぐり体形、鋭い目 (12)ウソ(B)写真は腹部が赤みを帯びたアカウソと呼ばれる亜種。フィーという口笛のような声で鳴く。時期にはサクラのつぼみを好んで食べる (13)ビンズイ(B)胸から腹の縦縞模様が目立つ。地上で採食、尾を上下に振る (14)ノスリ(B)カラス大のタカでずんぐり体形。地上のネズミなどを狙う。電柱の上にいることも多い。翼下面の一部と腹を横断するように茶色っぽい部分がある (15)ヒレンジャク(A)スズメより大きくムグドリより小さい。頭部の突き出た冠羽が目立つ。尾の先は赤い。3, 4 月頃に大群で現れ、電線に止まったり木の実を食べたりするが、毎年来るわけではなく見る機会はまれ(写真①~③はいずれも旭地区で K さん撮影のもの)。

旭地域で発行責任者が確認した野鳥(2008年～2021年)

- 科名は五十音順にしています。科内の種名も同様です。
- 種レベルまでで亜種レベルは表記していません。
- 記号の意味 p:写真撮影して確認、v:目視のみで確認、s:さえずりのみで確認、c:地鳴きのみで確認
(pの場合は「さえずり」等の情報があっても表示していません)

アトリ科:アトリ(p)、イカル(p)、ウン(p)、カワラヒワ(p)、コイカル(v)、シメ(p)、ベニマシコ(p)、マヒワ(p) ウ科:カワウ(p)
ウグイス科:ウグイス(p) エナガ科:エナガ(p) カッコウ科:ホトギス(v,s) カモ科:オシドリ(p)、カルガモ(p)、コガモ(p)、マガモ(p)
カラス科:カケス(p)、ハシブトガラス(p)、ハシボソガラス(p) カワセミ科:カワセミ(p) キクイタダキ科:キクイタダキ(p)
キジ科:キジ(p)、コジュケイ(p)、ヤマドリ(v) キツツキ科:アオゲラ(p)、アカゲラ(p)、オオアカゲラ(p)、コゲラ(p) クイナ科:ヒクイナ(p)
サギ科:アオサギ(p)、コサギ(p)、ゴイサギ(p)、ダイサギ(p)、チュウサギ(p) シギ科:イソシギ(v)、タシギ(v)
シジュウカラ科:シジュウカラ(p)、ヤマガラ(p) スズメ科:スズメ(p) セキレイ科:キセキレイ(p)、セグロセキレイ(p)、ビンズイ(p)
タカ科:オオタカ(v)、トビ(p)、ノスリ(p)、ハイタカ(p) チドリ科:イカルチドリ(p)、ケリ(p)、コチドリ(p)
ツバメ科:コシアカツバメ(p)、ツバメ(p) ハト科:アオバト(s,p[死体])、キジバト(p) ヒタキ科:エゾビタキ(p)、キビタキ(p)、コサメビタキ(p)、
コルリ(p)、シロハラ(p)、ジョウビタキ(p)、ツグミ(p)、トラツグミ(p)、ノビタキ(p)、ルリビタキ(p) ヒヨドリ科:ヒヨドリ(p)
フクロウ科:フクロウ(s,c) ブッポウソウ科:ブッポウソウ(p) ホオジロ科:アオジ(p)、カシラダカ(p)、ホオジロ(p)、ミヤマホオジロ(p)
ミサゴ科:ミサゴ(p) ムクドリ科:ムクドリ(v) メジロ科:メジロ(p) モズ科:モズ(p) ヨシキリ科:コヨシキリ(p)
レンジャク科:ヒレンジャク(p[Kさん撮影]) (合計 76 種)

リーフレットその6 発刊にあたって

旭地区で2008年から2021年の間に確認できた野鳥は上記の76種で、そのうち44種の写真を掲載しました。本格的に野鳥撮影に取り組んでいるわけではなく、散歩や生物調査などの際に撮影したものがほとんどです(最近はコンパクトデジカメでも小鳥が撮れるズーム性能のものがあつ、そのおかげです)。興味を持って見ていると意外に多くの野鳥が身近にいて、それぞれ精一杯生きていくことに気がつきます。さまざまな個性の鳥たちの美しいさえずりを聞き、活発で愛らしい姿を身近に見られることの喜びを感じます。そして、野鳥に限らず、さまざまな動植物たちが織り成す美しい自然を未来の世代に引き継ぐ責任が私たちにはあると強く思うのです。

写真はすべて旭地区内で撮影したものです(場所の詳細は非公開とさせていただきます)。

末筆ではありますが、この号の発刊にあたって多くのご教示と助言をいただいた日本野鳥の会岡山県支部長丸山健司氏と、写真や情報を提供していただいた地元の皆様に厚くお礼を申し上げます。

旭の里山・生きもの写真集 その6 身近な野鳥たち

2021年11月発行

発行責任者:石原隆志(岡山県自然保護推進員)、石原八束(同)

連絡先:hoonoki@mx32.tiki.ne.jp

HP: <http://hoonoki-koubou.jp> 「岡山中北自然観察誌」

協力:岡山県自然保護センター、旭の自然を守る会

表紙写真:メジロ(2020年4月3日撮影) 裏表紙写真:キジ(2014年10月7日撮影)

※このリーフレットは、公益財団法人おかやま環境ネットワークの2021年度助成を受けて作成しました。

※鳥の和名と分類は日本野鳥の会発行 野鳥観察ハンディ図鑑「新・山野の鳥(改訂版)」
「新・水辺の鳥(改訂版)」に従いました。

